

大人になって、また東京

第1期 OB 酒井 誠太郎

卒業から5年間札幌生活の後に、東京に戻ってきてから早2年経つ。あれほどまでに嫌いだった東京も少し大人になってから住んでみるとそう悪くはない。いまだ人の多いのは慣れないが、その代わりいろいろ東京での生活を楽しめるようになったからだ。ああ、こんな楽しみ方があるなら、ゼミとバイクとパチスロと二郎しか知らなかったウブな大学時代の自分に教えてあげたらいいのにと最近たまに思う。社会人になったOB・OGの方は多少同意してもらえと思うのだが、社会人になり自分で稼げるようになると遊び方が変わる。仕事で時間をかけられなくなった分、お金をかけられるようになり遊びに幅ができた。

もし、大学時代の自分に遊び方を教えてあげるとしたら、こう言うだろう。ひいきの球団作って外野で応援してろ、東銀座に行って歌舞伎を見とけ、あと、寄席も見ときな、と。言わずもがなこれらが今の自分の趣味であるのだが、思うにこれらは大変学生向きの遊びなのだ。つまり、金はそれほどかからないが、長く時間を潰せられる。

プロ野球の外野チケットというのはめっぽう安い。たかだか1,500円。しかも4月から9月の間ほぼやっている。球場に缶ビールを持ち込めないのは残念だが、紙パックの焼酎を持ち込めば酒には事欠かないだろう。全く以って、学生向けである。

私が野球観戦にめっぽう嵌るようになったのは実は東京に来てからである。インターネットでリーグの試合を毎日見られるということを知り、毎日見ているうちに応援しに行きたくなった。幸いなことに関東には千葉ロッテ・埼玉西武と2つもリーグ球団があるおかげでかなり見に行ける。そのおかげで一昨年のクライマックスシリーズは西武渡辺監督の胴上げを目の前で見る羽目になったのだが。

野球観戦をより楽しくするのはやはりひいきの球団を作り外野で応援することだと思う。昔はひいき球団を作らないようにしていたのだが、5年間の札幌在住の間にすっかり地元球団の日本ハムファイターズファンになってしまった。それからというものの世界が変わった。その日の日ハムの勝敗



北海道日本ハムファイターズマスコット「B・B」

でその日の気分が決まってしまうのだ。勝てば気分がいいし、負ければ気分が悪くなる。もちろん去年巨人に破れ日本一を逃してからしばらく落ち込んでいるのは言うまでもない。ひいきができてしまうというのも一長一短だ。

ただひいきができるるとひいきを心の底から応援したくなる。そうなると外野で大声出して応援するのはカラオケよりも良いストレス発散になる。そしてテレビの前での応援と違い、球場での自分の応援が少し選手の力になったような快感が味わえる。ただ相当声を張ることになるので喉をつぶすこと請け合いだ。

歌舞伎と聞くと大概の人はチケットが高いのではないかと敬遠しがちだが、何のことはない。一番安い席は2,500円。しかも4時間も楽しめる。さらには毎月25日間朝の11時から夜の9時までぶっ通しでやっているののでいつでもいける。そして実は歌舞伎は大抵鑑賞しながらの飲食は自由、もちろん酒も飲める。全く以って、学生向けである。



東京東銀座の「歌舞伎座」

私が歌舞伎にはまるようになったのはこれまたつい最近で、3年前に出張ついでで見に行った

のがきっかけだった。初めて見た演目が「宮島のだんまり」だった。十人ほどの歌舞伎役者が演奏に合わせて無言で右往左往しているだけの演目である。これは暗闇の中をさぐりあっている所を描写していて、ストーリー外視で歌舞伎の持つ形式美を見せるためだけに作られている。いわば、ドラマではなくダンスのようなものだ。だが日本舞踊のように振り付けがあるわけではなく動きあうだけ。こんなわけのわからない演目に心を揺さぶられてしまったのだ。サゲ音楽とそれに合わせる神妙な動き、衣装や隈取（化粧）の美しさ、そして何よりもツケに合わせて魅せる見得。いわば動いて音の出る美しい日本絵を見ているような気分になった。続く「土蜘蛛」という演目では化け物のような隈取をした役者が手から蜘蛛の糸を投げながら演じる殺陣に魅せられ、その次は「仮名手本忠臣蔵九段目山科閑居」で翌日討ち入りに行く男に嫁ぐことを許された女の魅せた恥じらいに泣かされ、最後に「三人吉三」で「こいつは春から縁起がいいや」という名台詞で自分までもがあだっぼい気分になった。それからというもの毎月欠かさず歌舞伎を見るようになった。

歌舞伎は難しくてわからないと敬遠する人もいる。けれども歌詞がわからなくとも洋楽を楽しめるのと同じように、歌舞伎もある程度ストーリーがわかれば十分な場合が多い。そのために事前にチラシやインターネットを見て大概のストーリーを頭に入れておけば十分だと思う。もしくは「イヤフォンガイド」という舞台の演出に合わせて同時通訳的に逐一ストーリーやせりふの意味を説明してくれる音声ガイドが別売りであるので、それもお勧めだ。実を言う私も未だに役者が何を言っているかわからない時がしばしば

あるし、ましてや裏で流れる長唄や浄瑠璃はほぼわからない。それでも歌舞伎役者がみせるその場その場の演出や舞台の美しさで十分楽しめている。

落語も落語で浅草演芸ホールや上野の鈴木演芸場、新宿末廣亭などで当日ぶらりと行って半日つぶせて2,500円程度、毎日やっていて、酒が飲める。全く以って、学生向けである。

落語も生で見るようになったのもこれまた東京に帰ってきてからだ。一番思い入れが強い公演は去年の6月、立川談誌の独演公演を見に行ったときだった。言葉がおぼつかず、話が途中飛んでしまう、はちゃめちな公演だった。糖尿病の治療のため、点滴で栄養を取っていて飯を食べていないので力が入らないと話していた。それまで談誌の落語を見たことがなかったので、なぜにあんな程度の（失礼！）老人が人気なのかかわからず、その後過去の独演会を録画したDVDをレンタルして見た。そして思った。凄すぎる、もっと早く凄さを知っていれば生で見られたのに！

2ヵ月後の8月談誌は糖尿病などの治療のために活動を休止した。そして3ヶ月のはずだった休止期間はつい先日さらに延長された。

もし、大学時代の自分に遊び方を教えてあげるとしたら、こう言うだろう。

生でしか感じられない素晴らしいものはたくさんある。

たとえば、去年の日本シリーズ第5戦、日本ハム対巨人の最終戦。シーズン中無敗だった日ハム武田久から巨人阿部慎之介がサヨナラホームランを打った瞬間、耳を劈く大きな歓声が東京ドームを覆った。日本ハムファンの私にとってこれ以上ない悲劇的なエンディングを演出する最高のBGMだった。

15代目片岡仁左衛門の一世一代女殺油地獄の千秋楽。仁左衛門主演最後となる迫力ある舞台の後、幕が下りてから5分以上も拍手が鳴り止まなかった。歌舞伎では新作でないかぎりカーテンコールはないにも関わらず5分もの間、観客は席を離れなかった。

そんな素晴らしいものが、遠くの街や海の向こうではなく、今自分の住む東京にもある。ただ、見逃してしまうと、もう一生見られないかもしれないよ、と。

あと一言、二郎は若いうちに存分に食べておいたほうがいい。



ラーメン二郎